

〔巻頭言〕

学 究 へ の 情 熱

経営総合科学（経営会計研究を改名）が100号となる。投稿の機会をいただき光栄に思う。先ずもって深甚の祝意を表さなければならない。植え込みをおえた桜の樹木が風雪にたえて巨木になりながらも、変わる事のない見事な花を咲かせている姿が脳裏をかすめる。

研究所の継続的運用に必要なことは、所員による学究への執着と情熱である。原稿集めに苦労した若いころの自分が懐かしく思い出される。原稿の締め切り日が過ぎても音沙汰のない方に催促すると、よく叱られたものだ。「予定した時までにはできないのが原稿というものだ。御玉稿を拝受いたしたく、平に、お願いします。と言わなければいけない。」というように諭されたこともままあった。編集子泣かせの方には、要注意のレッテルを貼ることで、溜飲を下げることもここで学習した。

経営会計研究所（現・経営総合科学研究所）は愛大・ゼミの恩師・故大石岩雄教授（経営学・一橋大卒）と故青木脩教授（会计学・東大卒）の存在にある。主としてお二人の尽力により、名古屋車道校舎夜間に会計講座を設けたことにある。当時、会計士・税理士の受験講座が名古屋地区にはなく、その社会的要請を受け入れたわけである。学内には、それに対する反対論を強く主張される教授もいたが、賢者の選択により会計講座は開設された。どんな議論があったか、ここにその1つを紹介しておこう。

当時の法経学部教授会で、「経営学は科学か」と某教授が質問された。それに応答した大石教授は、「科学かどうかを知りたいのであれば、私の講義を受講されたらどうか」と。爆笑のうちに議論は尽きた。

会計講座の余剰金が研究所の運営並びに機関誌の主な財源となり、経営・会計に関する和洋の専門書・専門雑誌の購入にも充てられた。講座に特別講義が加えられた。会計士・税理士の試験委員が講師として参加され、人気のある講座として定着するようになる。その当時、私の役割は、高名な試験委員の先生方を名古屋駅に出迎え、

帰られるときに駅までお送りすることであり、夕食に同席することもあった。今にして思えば、これが駆け出し研究者であった私には、得難い人生経験となった。

黒澤清、古川栄一、阪本安一、田島四郎、青木茂男、山榎忠恕等の著名な先生方である。大石教授が当時、108委員会のメンバーであられたため特別講師の先生方とも面識があり、思いを楽にした。会計講座の下働きを終えると帰りが遅くなる。名古屋から名鉄豊橋駅で乗り換える豊橋鉄道渥美線はいつも終電車。警笛と車輪のきしむ響きを思い出すことが今もある。懐かしい思い出の一コマである。

初期の経営会計研究誌に掲載された原稿は、講師の先生方の講義録を収録していたように記憶している。学究に対する真摯な姿勢を持たれていた大石・青木両教授の思いは、研究誌のレベルアップにあった。新任所員に対し、学会への参加、学会での発表、論文作成を試みるように求められていた。刺激的発言をなされていたことも記憶している。とりわけ若い学徒にその機会を与えることを主張されていた。市販される専門誌に原稿を求められるようになるまでかなりの年数が必要になる。まずは、学内誌に掲載することから始めなければならない。その意味から、経営会計研究誌から得られたものは大きいといえる。

文章は、「書けば書くほど難しくなる」、ということを言われた作家がいた。そうかと思うと、「書かないでいると、書けなくなる」、と言われたのは、神戸大学の恩師・久保田音二郎教授（故人）である。いずれも真理を突いているように思う。

大石教授は、刷り上がり論文に校正ミスが生ずることを常に気にされ、「校正・恐るべし」、の言葉を私に残して他界された。

大石教授は、一橋大の経営学を愛大に植樹し、私が神戸大の会計学を愛大に移植した。このように表現されたのは日本会計研究学会の某氏である。私にそんな自負はさらさらない。

大学の使命は、教育と研究と地域貢献などにあるが、研究成果をもつ教員の存在が大学評価の基本にあることには変わりがない。所員の大きいなる研究成果を期待して終わりとする。

（河合秀敏 愛知大学名誉教授 神戸大学・経営学博士）